

---

# 成り上がりな青年とメイド達

日高鳴海

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

成り上がりな青年とメイド達

### 【Nコード】

N4641X

### 【作者名】

日高鳴海

### 【あらすじ】

とある地域に住む、中途半端に髪を後ろに下げている大学生、比護克巳 ひごかつみ は、何時もの通りにコンビニのアルバイトに精を出していた。そして四月二十七日の日に赤髪黒眼の美女のメイドさんが普通の大学生の比護克巳を迎えに来たという。この日から、比護克巳の人生は真逆になるのだった。

## プロローグ

「いらつしゃいませー」

機械的に、マニュアル通りの挨拶をする。

コンビニでアルバイトをしている大学生二年生、比護克巳 ひごかつみ は週四のペースでこのコンビニでアルバイトに勤めていた。髪を後ろに上げているが、前髪に数本垂れ下がっている、何だかだらしのない雰囲気を漂わせる。

ただマニュアル通りにレジを処理し、ただマニュアル通りに挨拶をする。

その繰り返し。

(なんだかなあ……)

つまらなくはないが、面白くもない。

それが今の克巳の人生なのだ。

(何か面白いこと起きないかなあ)

そう思いながらため息をつく、店の自動ドアが開き、来客用の音楽が流れる。

「いらつしゃいま……!?!」

最後まで言い切る前に克巳は言葉を詰まらせた。

そりゃそうだろう。

来客がメイドさんだったのだから。

赤い髪を一本に纏め、目は黒。赤髪黒眼の美女がそこにいた。年齢は克巳と同じか、少し上くらいだろう。

コンビニ店内も彼女に目を奪われていて、もちろん克巳も例外ではなく、このメイドさんに目を奪われていた。

メイドさんはツカツカと克巳のいるレジの前まで歩いていき、レジを挟み克巳の前に立つと、薄い唇を小さく、そして上品に開いた。

「比護克巳様でございますね」

「あ、はい」

思わず声が裏返ってしまふ。

(だ、誰なんだろうこの人……それにどうして、俺の名前を……?)

当然の疑問だ。見知らぬ女性から、いきなり自分の名前の確認をされる、克巳は頭を悩ませる。

ストーカーか？ という考えも浮かんだが、その考えをすぐにそのへんに捨てた。自分にはそんな魅力はない。

それならこの美女は誰なんだー！ と、自分のあまり頼りにならない記憶のタンスを開けまくるが、やっぱり見覚えが無かった。

そんな克巳に目の前のメイドはこう言った。

「お迎えに参りました。比護克巳様」

「……え？」

いきなりそう言われ、ぼかんとする克巳だったが、目の前のメイドさんはポケットから素早くハンカチのような大きな白い布を取り出し、目にもとまらぬ速さで克巳の口を塞いだ。今の時間帯では、客も少なく、店員も休憩中の人が多く、事実上仕事をしているのは比護克巳のみのようなものだ。

数少ない客も突然の出来事に訳が分からない表情を浮かべている。

（な、な……っ！）

抵抗しようにも、メイドさんの男のような力で押さえつけられている為、抵抗が出来ない。

（あ、なんだ……意識が……とおの……く）

克巳はどんどん意識を失っていき、やがて自分で立つことすら出来なくなってしまうた。

比護克巳二十歳。

この四月二十七日を境に、彼のつまらなくもなく面白くもない人生が急変するのだった。

## 第一話（前書き）

ぜんぜん話が進まない……

## 第一話

比護克巳は母子家庭で育てられた男だった。

父は物心がついた頃には母の美奈子曰わく「遠いところに行って、帰ってこれない」のこと。

小さかった頃の克巳はそうなのか、というだけで特に何も感じなかった。そして月日が流れるにつれ、父の存在は元々薄いものだったのが、更に薄く、そして無くなっていった

「……………」

声がつつすらと聞こえてくる。

「…きて……………」

そしてより鮮明に克巳の耳に届く。

「……………」

克巳はゆっくりと目を開ける。柔らかな感触が身体に伝わり、白い天井が見える。

比護は起き上がり、意識を覚醒させるように目をこすり、自分がベッドに寝ていた事に気づく。

布団派である克巳にとって、ベッドはあまり馴染みの無い物。

「よつやくお目覚めですか」

「へ？」

ベッドの左側面にあのコンビニにいた赤髪黒眼のメイドさんが見下ろすように立っていた。

克巳は一瞬あっけに取られたが、コンビニでの出来事を思い出していき、やがて睨みつけるように、

「てめえ！ いきなり何のつもりだ！？ 誘拐か！？」

「いえ、誘拐ではありません」

淡々と、感情を感じさせない声色でメイドさんは言った。

克巳はその声色に背筋を震わせた。

少しビクつきながらも、威厳を保とうとしながら、強気にメイドさんに言う。

「じゃ、じゃあどうして俺を……！？」

「比護家を継いでほしいのです」

「比護家……？」

自分と同じ名字の家を継いでほしいといわれ、目を点にする克巳。訳がわかんねーっ！ というのが克巳の心理状況だ。それを察したのかメイドさんは説明をし始めた。

「比護家は明治時代から代々伝わる伝統的な家計です。この家も、全て克巳様のご先祖様が守ってきたものなんです」



克巳は黙って聞く。

しかし、聞いていくと共に疑問が膨らんでいく。

「それが俺に何か関係あるのかよ。確かに俺の比護だが、あんたが言う比護とは無関係ないと思うんだが」

「あなた様の父の名前をご存知でしょうか？」

“父”という単語が出てきた瞬間、克巳は少しだけ顔を強ばらせたが、それも一瞬で、ここにいるメイドさんには気づかれていない模様。

「……いや、俺はお母さんとの二人暮らしだったから……お父さんは顔も名前も知らない」

小学生の頃、克巳はお父さんの存在が気になり、アルバムなどを調べ上げようとしたが、よく考えると名前も顔も何も知らない人間をどうやって見つけようか？ アルバムでは確かに男の人も写っている写真もあったが、どれがお父さんか分からないために克巳はお父さんを探すのを止めたという過去があった。

「そうですね、なら教えます。あなたの父は今は無き当主の弟に位置する方、比護正鷹様です」

「比護正鷹……？」

初めて聞いた父の名前をリピートするように小さく呟いた。

「じゃ、じゃあその比護正鷹は……」

「……正鷹様は六年前に心不全でお亡くなりになりました」

「……」

お父さんが死んだ。

克巳の母、美奈子の言った「遠いところに行った」ということが現実になっていたことになる。

「……………そうなんだ、今は無き当主ってことは、前の当主は……………」

「……………だから、克巳様、この比護の血を引く最後の一人だから、ここに強制的に拉致しました」

「拉致って……………」

目の前のメイドさんの言葉に心底ため息が出てくるようだ。

そして、克巳はふとメイドさんの言ったことに疑問を持った。

「最後の一人って……………？」

「はい、実は克巳様以外にも三人後継者がいました」

「その三人は……………？」

「……………お亡くなりになりました。当主のご子息である竜二様は事故死、虎彦様は原因不明の病死、桂馬様は学校の階段から落ちての転落死という不幸が連続で続き、比護の血を引くのは克巳様、あなただけということになったんです」

「……………」

克巳は下を向き黙り込んだ。

やがてドンドン顔色が真っ青になっていき、

「ダッシュユー！」

素早くベッドから出て、この部屋から出て行くつもりだが、

「どこへ行くのですか」

神速並みのスピードでドアの近くまで移動し、逃げる克巳の足を足で払い、体勢が崩れた克巳の腕を後ろにし、頭も押さえつけ、床にたたきつけた。

「どうして逃げるんですか」

「さっきの話を通逃げるだろ！ 完全にこの比護家は呪われてるぞ！ どんだけ後継者候補が死んでんだよ！ 嫌だ！ こんな所にいたら死んじゃまうよーっ！！」

情けなく泣きわめく克巳にため息をついたメイドさんは克巳の首に手刀を入れ、気絶させた。

## 第一話（後書き）

感想などお待ちしています。

## 第二話

「ん……」

メイドさんの手刀のおかげで再び気絶した克巳は目を覚ます。

「ぐっ……頭痛い」

殴られた箇所を痛い痛い飛んでけーのようにさする。

さする位ではもちろん痛みは飛んでいく訳もなく、少しだけ痛む。

「何なんだよあの女あ……！ 突然拉致ったかと思えば、いきなり殴りやがってえ……！」

あの赤髪黒眼のメイドさんの顔を思い出し、腹がたってきた。

仕返ししたい気持ちは山々だったが、今はこの屋敷から逃げる事が今の一番重要な事だ。

克巳はベッドから起き上がり、窓に近づき、下を見る。外は明け方の明るさで、朝日が見えた。

時間帯を確認する為にポケットからケータイを取り出した。

今の時間、午前の四時二十分。

「俺がバイトしてたのは十一時頃だったから……意外とここにいたんだな」

そう思いながら、下を見て降りれるかを確認する。どうやら自分が寝ていた部屋は二階で、上を見てみると三階建てようである。

「……大丈夫か……いや、迷っている暇はないな」

素直にドアから出て行けば、下手したらこの屋敷の人間に見つかるかもしれない。

克巳は意を決し、窓から飛び降りた。

下は草木が茂っている綺麗に整えられたガーデンがあり、克巳は草木の上に不格好に着地した。

「ぐあああ……！」

足首に激痛が走り、立てなくなる克巳だったが、それも少しだけの事で、すぐに立ち上がり、無駄に広い屋敷をキョロキョロと周りを見渡した。

周りはテレビで見るような自然が広がっている。

「すげえな……俺の住んでた街にこんな屋敷は無かったぞ……」

つまり、ここは自分の住んでいた場所とは離れた場所と言うことになる。

何なんだよー、と心の中でぼやきながら、玄関を探す。

視力両目Aの克巳の目は、すぐに玄関を見つけた。いや、玄関というよりは門といったほうが適切だろう。それくらい立派な門だった。

そして、着地の所為で少し痺れている足を無理矢理に動かし、門に向かった。

のだが、

「あの、何をしてるんですか？」  
「！」

悪いことをしたのがバレた子供のように身体をビクツとさせた。  
恐る恐る後ろを振り向くと、あの赤髪黒眼のメイドさんとはまた違  
うメイドさんがそこに箒を持ちながら不思議そうな表情を浮かべ立  
っていた。

茶色い髪をセミロングにし、耳にかからないように引っかけていて、  
今時の若者、といった雰囲気醸し出している。

この茶髪のメイドさんもかなりの美人だ。

(えーっ!! メイドさんってこんな早くから仕事始めるのかよー  
っ!)

頭を抱えながら、メイドさんの早起き具合を感心していた。

克巳は一回深呼吸し、

「ダッシュ！」

今日二度目のダッシュを決めた。

しかし、足が痺れているために少し大きめの石に躓き、顔面から庭  
にキスをした。

ポベツ! と、克巳は声を上げた。

それを見た茶髪のメイドさんは、

「だ、大丈夫ですか、克巳様!？」

箸をその場に投げ捨て、克巳の側に駆ける。  
茶髪のメイドさんは克巳の身体に触れた瞬間

「イヤアアアア!!」

無意識的に、茶髪のメイドさんは克巳の顔面に世界を狙える位の勢いのあるパンチをやった。

鈍い音が響き、克巳はとどめを刺された形になった。

「はっ!」

我に返ると、克巳は転けた時の鼻血と、殴られた血でベトベトになっていることに気づいた。

端から見たら殺人現場じゃないか。

「ま、またやつちやった……」

泣きそうな、か細い声が茶髪のメイドさんの口から出てくる。

「何をしています。歩実」

「! さ、冴子さん……」

“歩実”と呼ばれた茶髪のメイドさんは、後ろにいた赤髪黒眼のメイドさん“冴子”を涙目になりながら呼んだ。

冴子は少しだけ眉間に皺を寄せていて、歩実に目をやり、言った。

「どうして克巳様がここにいるんでしょう。まさかここから飛び降りたとしてもいっしょでしょうか」

「さあ……でも、私が来た頃にはここにいましたけど……」



冴子は屋敷に目をやる。克巳が寝ている部屋の下には、いつもは整えられているはずの草木が崩れていて、克巳のズボンには葉っぱが付いているところを見ると、飛び降りて脱走を図ったという考えに至ったと同時に、克巳の行動力にも少し呆れた様子であった。そして次に、歩実の右拳には血がついている。その隣に克巳が倒れているとなると

「歩実」

「は、はいっ！」

歩実は素早く立ち上がり、背筋を伸ばす。

「歩実は早く掃除をしてきてください。克巳様は私が理香の所に連れて行きます」

そう言うと、冴子は克巳に近づき、難なく克巳を背負い、屋敷の中へと入っていった。

その様子を羨ましそうに見ながら、歩実はハツとなり、さつき投げ捨てた箒を拾い上げ、門へとパタパタと走っていく。

## 第二話（後書き）

感想やその他もろもろ待っています！

## 第三話

「……んん」

克巳は目を覚ました。

周りを見渡すと、一度見たような部屋に寝ていることに気付く。ていつか、比護家の屋敷の一部屋だった。

「どうして俺ここに寝ているんだっけ……確か脱走を図って………  
…あっ！」

あの時の出来事をすべて思い出したようだ。

部屋から飛び降りた後、茶髪のメイドさんに何故か殴られた事を思い出し、克巳は眉間に皺を寄せた。

「何で殴ってきたんだあのメイドは………」

大きいため息をついた克巳はベッドから降り、下に揃えてある安物のスニーカーを履き、再び窓から飛び降りようとしたが、

「何をなさるおつもりですか？」

凜とした声が克巳の耳に入る。

克巳は後ろを振り向くと、そこには出会った時と同じ表情の赤髪メイドさんにどこか申し訳無さそうにいる茶髪のメイドさんが立っていた。

克巳は二人を見て脱走不可能と考え、窓から飛び降りる事を諦める事にした。

「足と顔は大丈夫ですか？」

「え？ あ、うん。痛く無いが……って、おい茶髪のメイド！」

克巳が声を荒くすると、茶髪のメイドさんはビクツと身体を震わせた。

「いきなり殴って来やがって……俺に恨みでもなんのかコラー！」  
「すすすすいません……」

しょぼんと、心の底から申し訳無さそうにする茶髪のメイドさんに、克巳も文句を言いつらくなってしまう。

そして、赤髪のメイドさんがぺこりと頭を下げ言った。

「申し訳ありません。でも、これには理由があるんです」  
「り、理由？ 何だよそれ」

「歩実……この隣にいるメイドは、男性恐怖症でして、男性に触られると拒否反応を起こすんです」  
「……」

この茶髪のメイドさんの名前は歩実というらしい。

赤髪のメイドさんの説明を聞いた克巳は何ともいえない、微妙な味の料理を出され、意気揚々にその料理の感想を聞かれたような気持ちになっていた。

だが、克巳の中で疑問に思った事を聞いてみることにする。

「歩実さんはメイドに向いてない気がするんだけど。男とかと接する機会多いだろうし」

「確かに克巳様の言うとおりだと思いますが、歩実は元当主の武鬼

様に重宝されていましたから。だから、メイドを続けていけたんです」

「重宝？ 何が？」

「武兔様はマゾだったんです」

……この部屋の空気が一変した。

赤髪のメイドさんは凜としたいつもの表情であるが、歩実は身体を僅かに震わせて、赤髪のメイドさんの服を摘んでいる。

あー……、とこの気まずい空気の中、果敢に克巳は聞いてみる。

「……マゾって、あの殴られると嬉しいってなる、あのマゾか？」

「はい、武兔様はすきあれば歩実にちよっかいかけて殴られれば恍惚な表情を浮かべていました」

克巳は一応叔父にあたる性癖を知り頭が痛くなるような気がした。

自分はドMではないため、武兔の性癖が自分に遺伝していないことに胸をなで下ろしていた。

今までの話を聞いて、黙っていた歩実が小さい口を開いた。

「あ、私は確かに男性恐怖症ですけど……やる気はあります！ 絶対に克巳様には迷惑はおかけしません！ だから、私をここに働かせてくれませんか……？」

「私からもお願いします。歩実は根はいい子ですしメイドの才能はあるので、どうかここで働かせてやってくれませんか？」

ぺこりと二人のメイドに頭を下げされ、克巳はアタフタとする。

「い、いや。それ以前に俺は比護家の当主になるつもりも無いし……」

…そんな決定権は無いと思うんだが……」

「確かに、克巳様は今現在では当主にはなっていないません。仮の当主なんです」

「え？ そうなの？」

「はい、比護家の血を引く者は克巳様しか居ませんが、比護家の人間の中には克巳様は若すぎるという意見もある事もまた事実」

考えてみれば、そりゃそうだろう。

まだ人生経験が少ないペーパーの大学生に、比護家を背負える背中があるだろうか？

あまりにも身が重いと考えてもおかしくは無かった。

言ってしまうえば、克巳が当主として名が出てきたのは消去法のようなもので、候補がいなくなった。探したら、克巳がいた。そんなもんである。

そんな克巳を相応しくないという意見は分からなくもないのだ。

「だから、私達がいる」

「え？」

「私達が、克巳様を立派な当主にする。それが私達がこの屋敷にいる理由なんです」

「へえ……そうなんだ」

ふと歩実の方に目をやる。歩実は気まずいのか、目をそらした。

克巳はやれやれと思いつつ、髪を後ろにしている頭をガシガシと掻いた。

「……仮だとしても、この屋敷の一番偉いのは俺なんだよな？」

克巳は確かめるように、赤髪のメイドさんの目を見ながら言う。

赤髪のメイドさんは「はい」と短く、かつ分かり易く答えた。

「歩実さん」

「は、はいっ！」

克巳に呼ばれ、背筋を伸ばす。

そして克巳は言った。

「クビにはしないよ。ここで働いて、頑張つて男性恐怖症を治してくれ。こんな症状持ってたら、将来大変だろ？ いざという時は俺も協力するからさ」

「……………ありがとうございますっ！」

満面の笑みを浮かべながら、元気よく頭を下げ克巳に礼を言った。

「……………優しいんですね」

赤髪のメイドさんはそう呟いた。

「そうか？」

「ええ、正鷹様そっくりです」

「……………そうかい」

父のことはよくわからないため、適当に返事をした。

赤髪のメイドさんはふと克巳に束になつている紙を渡してきた。

「なにこれ？」

「この屋敷にいるメイド達の名前を写真です。出来るだけ早く覚えてくれるように作りました」

「あ、ありがとう……………」

紙を受け取り、一枚目の紙を見ると、名前と生年月日などの情報が書かれていた。

「ふうん、アンタは柏崎冴子っていうんだ」

「冴子で構いません。メイド達も呼び捨てで構いませんよ」

「あ、そう……」

「では、お邪魔になるとあれなので、失礼します。今日はゆっくり休んでいてください」

「あ、うん」

「失礼しました」

二人は礼儀正しく、部屋から出て行った。  
メイドとしての教養は高いようだ。

「冴子……あ、同い年だったんだ……」

正直な所、四歳近くは上かな？　と思っていただけあって、意外だった。

「……」

その後は黙って顔を名前を覚えるのに時間を費やす克巳だった。



## 第四話

克巳が流失しても困らないような個人情報などが書いてある紙を見ていると、コンコンとドアのノックする音が聞こえた。

「あ、はい。どうぞ」

何故か少しだけキョドる克巳。  
洋風のドアが開いたそこには、

「失礼します」

柏崎冴子が手を前に臍より少しだけしたに置き、礼儀正しく頭を下げた。

「どうしたんだ……冴子」

さん、と付けようか迷ったが、呼び捨てでもいいと言っていたので、呼び捨てにすることにした。

「克巳様はまだこの屋敷の構造をご存じありませんよね？」

「あ、ああ……そうだな」

知らなくて当然だ。

初めて来た建物の構造を知っている人間など、居ないだろう。

克巳が答えると、冴子は凜とした目を克巳に向け、言った。

「なら案内します。ここに住みますから、部屋の場所などを知っ

ていただかないといけません」

「それもそうだな。よし、案内してくれ冴子」

「分かりました。ついてきてください」

克巳はひとまず紙を座っていたベッドの上に置き、冴子の言われた通りに後をついていった。

「ここはお風呂場です。男女の区別がありませんので、注意してください」

「あ、ああ。了解」

屋敷内をいろいろ案内されて十分弱が経過。  
廊下には何だか高そうなカーペットがずっと先まで続いている。そして、窓が何枚もあり、掃除が大変そうだと思ったのだが、廊下、窓のふちには埃すらなく、掃除が隅から隅まで行き届いていることが見受けられる。

こんなデカイ屋敷の主になるなんて……人生何あるか分からないな。と言うのが克巳の心境だった。

そしてハッと、思い出したことがあった。

「なあ冴子」

「なんですか？」

「俺の前住んでたアパートの事なんだけど……」

克巳はここにくる前は、二万円の格安ボロアパートに住んでいた。大学からは歩いて五分もかからない場所にある。冴子は歩いてきた足を止め、身体ごと克巳の方に向ける。

「あのアパートでしたら、私達が解約しました。あそこには用は無いですよう?」

「ま、まあ、そうだな。ここに住むんだったらあのアパートは契約してても意味ないし」

荷物に関しても、必要最低限の家電品位しかなく、しかもそれはイカせる寸前まで使われていた家電品であるため、捨ててもらっても構わないものばかりだった。

服にも克巳は今時の若者にしては、あまりこだわりがあるというわけでもなく、安い衣服を適当に着ているだけにすぎない。

「家電品は使い物になりなそうでしたから処分しました。衣服はどういたしますか?」

「うーん……別に愛着があるわけじゃないし、リサイクルショップにでも売っておいて構わない」

「わかりました」

会話が終了し、無言で屋敷内を歩いていく。

三階、二階と歩いてき、一階に降りていく。

一階を案内されながら歩いていると、一つの部屋を克巳は目についた。

「なあ冴子」

「はい、何ですか？」

「この部屋って武道場か？」

「そうです。興味なさそうなどで案内はしないように思っていたんですけど、入ってみます？」

「ああ、入ってみたい」

そう克巳は答え、冴子と克巳は入り口で靴を脱ぎ、中へと入っていく。

中には奥の真ん中には掛け軸があり、『快刀乱麻』とかいてある。

克巳は物珍しそうに、初めて来た街のようにキョロキョロ周りを見渡した。

入って右側の端っこには、竹刀立てがあり、数本の竹刀が立て掛けである。

その近くには一式の防具が綺麗に二つ並んでいた。

克巳は近づき、垂れネームを見てみると、右側の垂れには『柏崎』

と書いてあり、左側には『比護』と書いてある。

「冴子って剣道するんだ」

「はい、私がこの屋敷に来た事を期に当主様の奥様、比護燕様に剣道を習いました」

「へえ……あ、そんな人が居るなら挨拶した方がいいよな。燕さんはどこの部屋にいるんだ？」

と、言った瞬間さつきまでの空気が凍りついた感覚に襲われた。

克巳の笑顔は固まり、地雷を踏んでしまった事を悟った。何故なら冴子から出てくるオーラが何だか悲しげなものになってしまったから。

滝のようにダラダラと汗を掻きながら、冴子に何を話しかけようか

考えていると、

「……燕様は、当主様である武兔様が亡くなった三日後、手首を切って自殺をしました」

声がどんどん小さくなっていく。

克巳はどうしていいか分からず、話しかけようとしても話しかけられない。言葉が出てこない。

(ど、どうしよう……まさか、そんな事情があったなんて知らなかった……悪いことしたな)

手と腕を意味不明に動かし、あーだこーだとオロオロしていると、くるりと冴子は克巳のほうに身体を向けた。

そして、少しだけ元気がない様子の冴子が重い口を開いた。

「……燕様は私の目標でした。美人で、気が利いて、剣道が強くて、武兔様の事を心の底から愛していた、まさに才色兼備、素晴らしい女性でした」

克巳は黙って聞いていた。

燕が武兔を愛していたが故に、武兔が亡くなったすぐに後を追うように亡くなった事を、克巳は理解する。

普通はそうそうできることじゃない。死ぬという事は、人間が一番恐れているいて、必ず人間が通らなくてはならない道。そんな道に自分から選ぶなど、そうとうな覚悟がいるだろう。

悲しげに下げている冴子の頭を泣きじゃくっている子供をあやすように、優しく撫でた。

冴子は突然のことに、目を見開いた。

「悲しむな、とは言わないけど、あんまり落ち込んじゃダメだぞ。確かに大切な人を失うことは辛いけど、くよくよしないで、失ってしまった大切な人の分まで生きようって思え。もう過去は変えられないんだからさ、どうせ生きるなら、明るく過ごした方が得だろ」

克巳も過去に大切な人を失っている。

だから……だからこそ言える言葉だった。

ある意味、克巳が言った言葉は自分にも言い聞かせている事でもあるのかもしれない。

冴子は少しだけ驚いた表情を浮かべたが、すぐに凜としたいつもの表情に戻った。

「……ありがとうございます。克巳様のお言葉の通り、前を向いて生きようと思います」

「……そうか」

克巳は手を止めた。

冴子はどこか名残惜しいような表情をしていたが、克巳は気づかない。

「では、引き続きご案内します」

「ああ、頼むよ」

冴子は克巳の隣を通り過ぎ、武道場の入り口へと姿勢良く歩いていく。

その時、一瞬。

その一瞬を克巳は見逃さなかった。

冴子が少しだけ、笑顔を浮かべていた事に。

## 第五話

武道場を離れ、屋敷内を案内されていると、再び克巳はテレビで見えたことがないような部屋に目をやった。

「どうかなされましたか？」

立ち止まり、左にある部屋をみる克巳に冴子は問いかける。

「この部屋って誰が使ってるんだ？」

左にある部屋を指差しながら克巳は冴子に聞いた。

この部屋は、常にドアが解放されている状態にあり、中には吊されるボクシングに一心不乱にパンチを入れている女性、筋肉トレーニングや体力作りに使われる道具、真ん中にはボクシングのリングが設置されていて、中からはバシン！！バシン！！という音が聞こえてくる。

「……………入ってみますか？」

表情は変わらないが、声はなんだか嫌そうな感じがしたが、克巳は不思議と入ってみたいという気持ちがあった。

この感覚は武道場でもあった。

「ああ、入ってみたい」

と言い、克巳と冴子は中へと入っていく。

ボクシング場にいた女性は、半ズボンに露出度が高い赤と黄色のワンピースが付いているタンクトップを着ていた。

女性はサンドバックを乱打していたが、動きを止め、黒いグローブで汗を拭った。

「ふう〜……ん？」

休憩のためにリングの近くに立ってかけられていたパイプいすを組み立て、それに座ると、ようやく克巳達の存在に気づく。

「お、昨日拉致られていた当主様じゃないか」

タオルで汗を拭いながら、入り口あたりで立っていた克巳達に近づいていく。

克巳は少し目の前の黒いベリーショート的女性に目をやり、今日さつき書類で見た顔を思い出そうとして、ふと、思い出す。

「あ、遠山美鈴……だっけ？」

「へえ、もうアタシの名前を覚えてくれたのか。ありがたいな」

今まで出会った二人のメイドとは自分に対する対応が違う。フレンドリーで、まるで友達に気軽に話しかけているように。美鈴はニツと、はにかんだ笑顔を浮かべ、

「アタシのことは美鈴でいいぞ。なあ、克巳」

「え？ 俺のこと知ってるの？」

「そりゃそうだよ。次期当主のことくらいは知ってるぞ」

へえ、と克巳は返した。

「……ボクシングやってるんだな」



「ああ、これは武兎様の影響なんだ」

ボクシングのリングを見ながら、そう答える。

比護家の今は亡くなった夫婦はどうやら、二人ともスポーツをしているようだ。

「へえ、そうなんだ」

「……私はボクシングは危ないから止めといた方がいいと何度も言っているんですが……」

ふと、ため息混じりにそう言うのは柏崎冴子。

確かに、ボクシングは殴り合うという事もあり、近い将来に頭に傷害がでるとか、身体に悪い影響が出ることもある。

ましてや、女性がボクシングをやれば、筋肉トレーニングなどで身体から女性特有の柔らかさが無くなる事もある。

なので、冴子は武兎がボクシングをやる事に反対していて、美鈴にも止めるようにも言っているのだが、

「えーっ、別にいいだろ。アタシの楽しみでもあるんだし、スポーツに危ないことは付き物だろう」

「しかし、ボクシングは殴り合うのでしょう？ もし致命傷などを負った場合にはどうするのですか。我々は長く当主様に仕えるのですよ」

「ま、まあ。やりたいようにやらせれば良いんじゃないか……？」

「さっすが当主様！ 話が分かるな！」

ガシツと。

美鈴の腕は克巳の首に絡め、ダハハハハハー！！と、笑い声を上げた。

美鈴の身体と密着する形になっている克巳は、さっきまで美鈴は汗

を掻いていた所為か、どこかツンとする匂いがした。

そして、妙に発育されている女性特有のある場所にも当たっていて、克巳はほとんど顔が赤くなっていく。

冴子はやれやれといった感じで、コツンとどこから音もなく出した木刀で軽くたたいた。それと同時に克巳は危険地帯から脱出に成功していた。

「いたっ！」

「全く、少しは自重してください」

冷静に淡々と言う冴子に、ガルルーとつかみかかるように美鈴は言った。

「全く、ネチネチとうるさいババアだなあ！」

「ババア？」

ギロリ！ と、冴子の目の鋭さが変わった。

いつも凜とした目をしているが、それ以上に、とても鋭利な目の鋭さになっていた。

それに克巳は気づいたが、美鈴は気づかないようで、ベラベラと火に油を注ぎ続けている。

そして、決定的な言葉が美鈴の口から放たれた。

「怒ってばかりいると、より年上に見られるぞ」

ブチッ！ と、何やら手遅れな音が聞こえた。

流石の美鈴も気づいたのか、さっきまでの能弁が嘘みたいに黙り込み、恐る恐る冴子の方を向いた。

そこには鬼がいた。

「……まだ、教育が行き届いてなかったようですね」

「あ、いや……今のは、言葉の綾というか、何というか……アハハ……」

ズンズンと冴子は木刀を床に引きずりながら美鈴に近づき、美鈴も後ろに下がっていく。

だが、ここは外じゃない。壁がある。後ろに下がり続け、遂には壁に背中をぶつけた。

「あ、あ……」

「……では、逝きましようか」

「何だか漢字が違う気が……」

冴子は美鈴の着ているタンクトップの後ろ側を掴み、ズルズルとどこかえと引きずっていく。

そして、克巳の立っているあたりまで引きずり、冴子は立ち止まる。美鈴は「助かった？」という表情を浮かべていた。

「すみません克巳様。これから美鈴に教育をしなければならぬので暫く離れます。大体の案内は終わったので、後は夕方まで時間をつぶしてもらえませんか？」

「あ、うん。わかった……」

少しだけ怯えながら、克巳は言った。

冴子は、克巳の隣を通り過ぎ、どこかの部屋へと向かう。ちなみに、通り過ぎる際に美鈴は手をパタパタと動かし、克巳に助けを乞いて

いたが、克巳は助けることは不可能と判断し、美鈴から目を背けた。その時の美鈴の絶望に染まった顔は夢に出てきそうだ。

ポツンと、その場に残された克巳は一言。

「……冴子と美鈴って、一個違いだよな……？」

ちなみに、冴子は二十歳。美鈴は十九歳である。確かに、冴子は二十歳には見えない。だが、それはけして老けているからではなく、冴子からは大人の雰囲気があるからである。それに反し、美鈴は子供のような雰囲気があり、現役の女子高生のような女性である。

克巳はガシガシと頭を掻いた後、ボクシング場を後にした。

「さて、どこに行こうかな」

ちよっとした探検気分のは護克巳であった。

## 第六話

比護克巳は無駄に広い屋敷内を歩いていた。

冴子に案内されたところは、基本的に生活に欠かせない部屋だけで、トイレや風呂場、居間などといった部屋。

なので、この数多にある部屋の場所などはよく分からない。

克巳は階段を上がり、二階の廊下を歩く。

階段から上がって六つ目の部屋を通り過ぎようとした瞬間、けたたましい爆音が、六つ目の部屋から鳴り響き、ドアが吹っ飛び、克巳は爆風に巻き込まれ、吹っ飛んできたドアが顔面へと鈍い音をたて、直撃した。

何だか最近顔面に怪我よくするなー、と他人の不幸話のように思ったが、残念ながらそれは克巳の事であり、笑い話にもならない。

白い煙が立ちこめる中、うっすらと人間くらいの大きさをした影が出てきた。

痛む顔面を押さえながら、煙の方を向く。

何だか声が聞こえてきた。

女性の声である。

「いやー、失敗しちゃったツスねえ」

無駄に明るい、今の克巳にとってイラっとくるような声色。

「あ、あれ？ 眼鏡はどこいったンスか？」

眼鏡というのは、恐らく克巳の足下に転がっている白い眼鏡のことだろう。克巳はその白い眼鏡を拾い上げ、レンズが割れ、最早眼鏡としての効果は期待できそうに無い眼鏡を見て、克巳は少しばかりため息をついた。

「眼鏡つてこれか？」

「え？」

煙が晴れ、そこにいたのは、やっぱりメイドさんだった。

しかし、冴子や歩実のようにロングスカートではなく、膝あたりがギリギリ見えるくらいの丈の長さのスカートを履き、上には恐らく爆発が原因と思われるが、少しだけ黒くなっている白衣を羽織っている。

背中の中あたりまで伸ばした髪の毛の横を縛り、サイドテールにしている銀髪メイドさんは、視力が悪い人がよくする目を細める行為をしながら、克巳のほうに歩いてくる。

「んーっ？」

「あ、ちよっ……」

ズイツ、とキスするのではないかというくらい顔を近づけた。

思わぬ大接近に、小中高と全くモテていない克巳は動揺の色を隠せずにいた。

「……あつ、克巳さんツスカ。怪我の具合はもう大丈夫ツスカ？」

「……今の爆発の所為で、怪我が再発したよ。横江珠理 よこえじゆり」

顔を指差し、ギャグ漫画のノリのようにダラダラと血を流し続ける

克巳に、珠理は眉間に皺を寄せ、ポンと手を叩き、

「なるほど、では治療しないといけないッスね。ついてきてください」

そう言っつて、珠理は先ほど爆発した部屋へと入っていく。この時、克巳はあることに気づいた。

(ドアの周りがあんまり壊れてないな……)

そう、ドアは吹っ飛んだものの、ドアの周りには爆発音の大きさと比べ、少しだけひびが入っているくらいで、まるで計算したかのような爆発のようだ。

「あだっ」

「……………」

彼女は、入り口の場所を間違え、廊下の壁に頭をぶつけ、下にうつすくまっつて痛みに耐えている。

やれやれと言わんばかりに中途半端に髪を後ろにしている頭をガシガシと少々乱暴に掻き、吐き捨てるように克巳は言った。

「ほら、恐らく意味はないと思うが、眼鏡」

「あー、ありがとうございます」

克巳はレンズが割れていて、淵も変な方向にひん曲がっている眼鏡を渡し、珠理はそんな眼鏡を受け取ると、

「……………」

「……替えは無いのか？」

レンズがいたるところにヒビが入っているのでは、眼鏡の役割は果たしはしないだろう。

「替えはあるツスけど、おそらく今の私ではそこまでたどり着くことは不可能ツスね」

「そうか。なら、俺が取ってくるよ。どこにあるんだ？」

「え？ いや、主様にそんな事を頼むわけには……」

「気にすんなよ」

「つか、当主にある気も進まないんだが……、と、ぼそりと付け加えた。

克巳自身に当主になりたくない理由も、ここにきてから、冴子の話によると、『竜二、虎彦、桂馬、武兔、燕、そして父の正鷹』の六人が死んでいて、もしかしたら、自分自身も死んでしまうのではないかという不安もあった。

しかし、今出て行けば、ホームレスの大学生になってしまう。

さて、話を戻そう。

「替えの眼鏡はどこにあるんだ？」

「この部屋にある私のベッドの近くにある机に置いてあるツス」

「分かった。机だな。待ってな」

克巳は珠理の部屋の中へと入っていく。

まず、入ったの感想。



(なんだか、理科室みたいな部屋だなあ)

まずみて思ったのが、それだった。

入って右には理科室でみる二枚式の黒板に、水などをこぼしてもすぐに乾く、黒い机が黒板の前に置かれていて、左側には、ベッドや本棚に机、まるでこの部屋は、自室と理科室を足して二で割ったような変わった部屋だ。

ビーカーやら、フラスコなどのガラスで出来た物が木っ端みじんに粉碎されている破片が床に散乱していて、これでは視界が悪い人が歩くには危ないかもしれない。

克巳が行って正解だ。

(あの爆発、右側だけが被害受けてる……やっぱり珠理は計算していたのかもしれない)

ベッドや本棚などがある所には、ガラスの破片が少しだけ吹っ飛んでいるだけで、被害はあまり無い。

「眼鏡眼鏡……あ、これかな？」

銀色の眼鏡ケースらしき物が机の上に置いてあるのを見つけた。

確かめるように、その眼鏡がちょうどよく入りそうな箱を開けてみると、中には黒縁眼鏡が新品のように入っていた。

どうやら、珠理の言う眼鏡はこれのことに違いない。

克巳は、その銀色の眼鏡ケースを手に取り、靴を履かなければ、足の裏が怪我してしまうであろう床を歩き、入り口にいる横江珠理の元へ向かう。

「はいよ、これだろ？」

「あ、はい。これッス！」

克巳は珠理に銀色の眼鏡ケースを手渡すと、珠理はパアッと表情を明るくしながら、銀色の眼鏡ケースから黒縁眼鏡を取り出し、それをかける。

「おーっ、よく見えるッス。……あ、ありがとうございます克巳さん」

「あ、気にしないでいいよ。それより、何だか視界が赤い気がするんだけど……」

「そりゃそんなに血を流せば……」

「そういや、怪我してたんだっけ……あれ？ 何だか意識が朦朧と……あふん」

パタリと、克巳はこの屋敷に来て三回目の気絶を味わうことになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4641x/>

---

成り上がりな青年とメイド達

2011年10月19日07時08分発行